

西下条五割遺跡

中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴う発掘調査報告書

2024. 3

山梨県観光文化・スポーツ部
東海旅客鉄道株式会社

西下条五割遺跡

中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴う発掘調査報告書

2024. 3

山梨県観光文化・スポーツ部
東海旅客鉄道株式会社

西下条五割遺跡のあらまし



西下条五割遺跡 調査区遠景（西から）

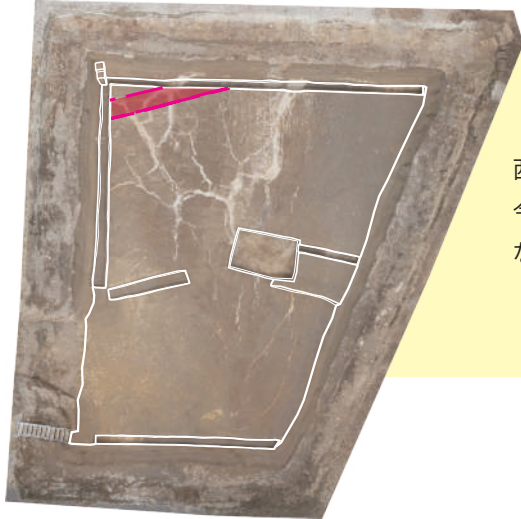
西下条五割遺跡は甲府盆地南部の低地、荒川・笛吹川の合流点にほど近い氾濫原の上に立地しています。リニア中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴い新たに発見され、発掘調査を実施しました。

江戸時代の3時期に渡る水田跡が発見され、畔や畔上の水口（水を引き入れるための出入口）人が作業した足跡が見つっています。その他、大きな地震があったことを示す噴砂の痕跡も確認されました。

今回の調査では長期間に渡る水田としての利用が明らかになりました。

これまで遺跡の発見が少なかった甲府盆地南部。周辺地域での今後の発掘調査を通じて、昔の人々の生活の様子が明らかになっていくかもしれません。

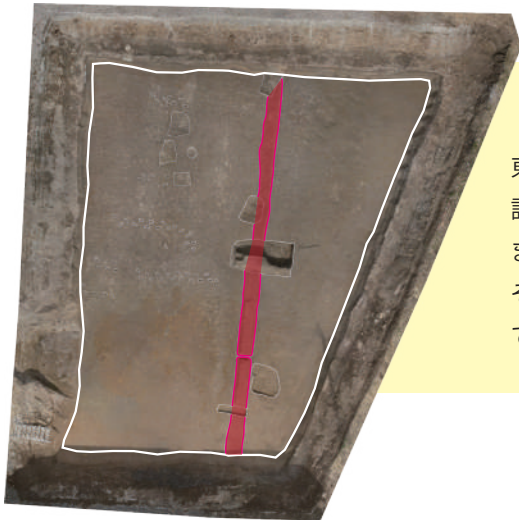
調査から分かった当時の水田



江戸1期（3面目）の畦畔

西南西から東北東に伸びている様子が分かります。今回の調査では水口や、水田に水を流し入れる方向などは確認できませんでした。

地震により噴砂が起こった様子→



江戸2・3期（2面目・1面目）の畦畔

東西方向に伸びており、調査区南部において水口が確認され、西から東に水を流していたものと思われます。また、畦畔が洪水により抉られ、それを復旧した痕跡見ることができました。

畦畔を作り直した様子→



赤く着色された範囲が今回見つかった畦畔です。上図・下図の比較から、長期間の水田利用の中で、区画が変化していることが分かります。また、水田は洪水による砂に覆われており、洪水によって畔が壊され、復旧した様子も見ることができました。

現在でもしばしば水をつくことのある甲府盆地南部において、当時の人々が洪水被害と付き合いながら水田耕作を行っていた様子が見て取れます。

序 文

本書は、中央新幹線（品川・名古屋間）建設に伴い、2022年度（令和4年度）から2023年度（令和5年度）に実施した西下条五割遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

西下条五割遺跡は、甲府市西下条町地区内にある近世の遺跡です。今回の調査では計3面の水田跡が見つかり、当該地域において継続的な水田利用がなされていたことが明らかとなりました。甲府市南部、特に笛吹川右岸の低地における埋蔵文化財の調査事例は乏しく、今後の調査と合わせて歴史を辿る手掛かりになるものと考えられます。

本書が、今後の西下条五割遺跡の保護、地域の歴史学習や研究のために、多くの方に御活用いただければ幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び調査報告書の刊行に当たり、御理解と御協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

2024年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 北村 徹

例 言

- 1 本書は西下条五割遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の調査原因は、中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴うものである。原因者は東海旅客鉄道株式会社である。
- 3 遺跡は山梨県甲府市西下条町地内に位置している。
- 4 発掘調査・整理作業・報告書刊行は山梨県観光文化・スポーツ部文化振興・文化財課からの依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センター（甲府市下曾根町所在）が実施した。令和4・5年度の調査体制は次の通りである。

調査主体 山梨県観光文化・スポーツ部（令和4年度は山梨県観光文化部）
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
所長 西川秀之（令和4年度）・北村徹（令和5年度）
調査研究課長 宮里学（令和4年度）・小林健二（令和5年度）
- 5 発掘調査は、岩永祐貴、秋山浩文（令和4年度）、熊谷晋祐、鷹野あきこ、秋山浩文（令和5年度）が担当し、本格的整理作業は熊谷、鷹野が担当した。
作業員については次のとおり。
発掘作業員 飯室恵子 直井光江 中込榊
シルバー人材センター：甲府市・笛吹市 20名
山本甫 土屋忠彦 土方久 堀田陽子 上野智啓 田丸進 功刀静 若尾正朋
新田史男 清水治重 小池幹子 鮎川暦子 今野晃 櫻林芳秋 堀内祐二 黒田健二
筒井勤 榎原豊人 白石雅徳 山田貴仁
- 6 本書の第4章については、分析を委託した株式会社パレオ・ラボが執筆した。その他の文章執筆および全体の編集は鷹野、熊谷が行った。
- 7 遺構の写真については岩永が撮影した。遺物写真については、鷹野が撮影した。
- 8 発掘調査は令和5年2月6日から令和5年4月21日まで実施した。本格的整理作業ならびに報告書作成を令和5年度に実施した。
- 9 出土遺物の整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
- 10 本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物などは山梨県立考古博物館に保管してある。
- 11 発掘調査に係り山梨県観光文化・スポーツ部文化財振興・文化財課が調整機関となり、埋蔵文化財担当熊谷（令和4年度）、岩永（令和5年度）が担当した。
- 12 発掘調査及び整理作業にあたって、以下のように委託をした。
 - ・基準杭の測量、遺跡全体、遺跡景観の航空空中写真の撮影及び測量図化…株式会社シン技術コンサル
 - ・採取炭化材の自然化学分析…株式会社パレオ・ラボ
 - ・出土金属製品の保存処理…公益財団法人山梨文化財研究所
 - ・発掘作業員の派遣…甲府市シルバー人材センター、笛吹市シルバー人材センターなお、遺構の測量及び図化システムとして、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。

凡 例

- 1 本報告書中の測量図面、実測図面の縮尺はそれぞれの挿図内に記した。
- 2 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990年度版による。
- 3 遺構図版中のドットマークは遺物を示しており、付された番号はそれぞれの遺物に対応している。ドットマークは、土器●、石製品▲、金属製品☆、木製品◆を基本とする。
- 4 遺構断面図の左側基点に付した数字は標高（m）を表す。
- 5 遺構の写真はニコンD 850 デジタル一眼レフカメラで撮影した。
- 6 本報告書中遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地図を利用した。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の目的と課題	2
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 室内作業等の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 発掘調査の方法	8
第2節 基本層序	8
第3節 発見された遺構	14
第4節 発見された遺物	16
第4章 自然科学分析	23
第5章 総括	26

写真図版

報告書抄録・奥付

図 版 目 次

第 1 図	調査区位置図	1
第 2 図	西下条五割遺跡周辺遺跡分布図	6
第 3 図	調査区土層図	9
第 4 図	遺構配置図（江戸1期）	11
第 5 図	遺構配置図（江戸2期）	12
第 6 図	遺構配置図（江戸3期）	13
第 7 図	噴砂及び個別遺構図	15
第 8 図	遺物分布図（1）	17
第 9 図	遺物分布図（2）	18
第10図	遺物垂直分布図	19
第11図	出土遺物実測図	21
第12図	暦年較正年代グラフ	25

表 目 次

第 1 表	西下条五割遺跡周辺遺跡一覧表	7
第 2 表	出土遺物観察表	22
第 3 表	測定試料及び処理	23
第 4 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	24

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

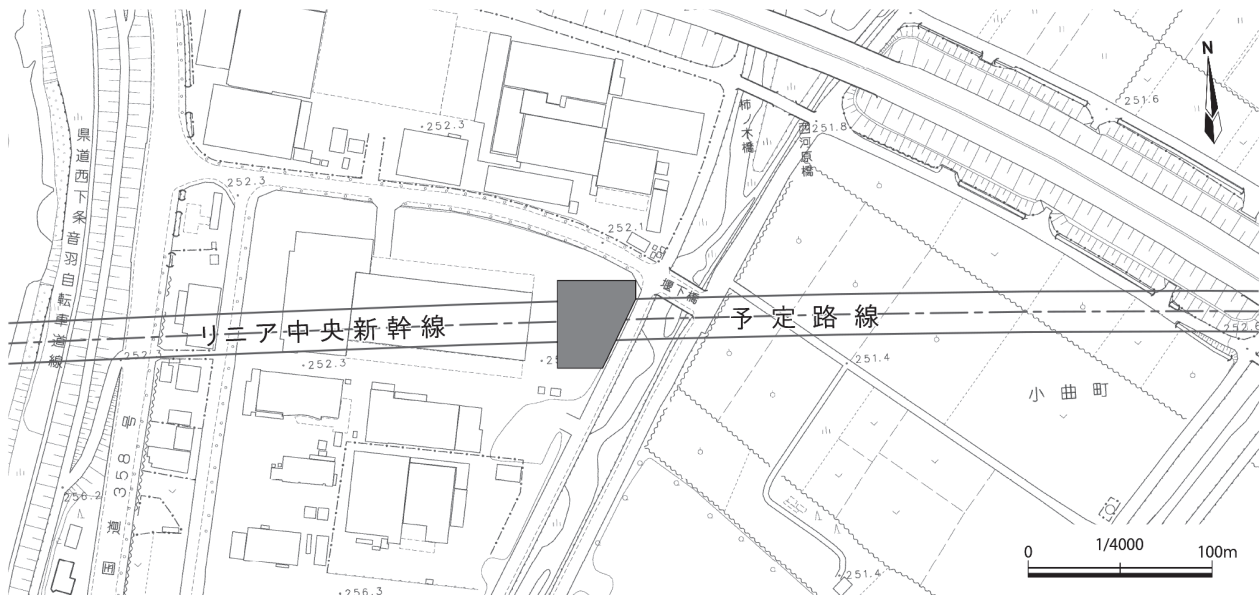
中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事は、東京都品川駅付近を起点として、本県甲府市、赤石山脈南部を経て愛知県名古屋市までの約286kmを超伝導磁気浮上方式で走行する新幹線鉄道事業である。東海旅客鉄道株式会社により本事業が計画されたことを受け、平成30年度より実験線以西で本格的な試掘調査を実施している。

用地の取得に合わせ、山梨県埋蔵文化財センターが令和4年3月14日～17日に山梨県甲府市西下条の事業用地内を対象とした試掘調査を実施した。その結果、畦畔を伴う水田跡とみられる、中世～近世にかけての遺跡の広がり確認されたため、遺跡が確認された範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地「西下条五割遺跡」として遺跡台帳に新たに登載した。

試掘調査の成果を踏まえ、東海旅客鉄道株式会社と山梨県観光文化・スポーツ部（文化振興・文化財課、埋蔵文化財センター）による協議を実施し、建設工事により埋蔵文化財に破壊が及ぶ橋脚基礎部分、約370mを対象に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

なお、今回の埋蔵文化財調査に係わる法的手続き等は以下のとおりである。

- ・令和5年2月9日 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県知事へ提出（埋文第1348号「埋蔵文化財発掘調査の実施について」）。
- ・令和5年4月18日 文化財保護法第100条第2項の規定による埋蔵文化財発見についての南甲府警察署への通知の提出を山梨県知事へ依頼（埋文第88号「埋蔵文化財の発見について」）。
- ・令和5年6月2日 山梨県観光文化・スポーツ部文化振興・文化財課長に実績報告書を提出（埋文第272号「実績報告書の提出について」）。



第1図 調査区位置図

第2節 調査の目的と課題

令和4年3月に実施された試掘調査において、中世～近世とみられる水田跡が確認されたことから、これらの遺構・遺物を記録保存することを主目的とした。また、本遺跡周辺では遺跡の発掘調査事例が少ないため、試掘調査で得られた計3面に渡る水田がどの時期に当たるものかの把握することや遺跡の形成及び埋没過程の検討に努めた。

調査上の課題としては、本遺跡が甲府市南部工業地帯西下条地区内にあり南北を工場に挟まれること、試掘成果より掘削深度が2m以上と想定されたこと挙げられる。以上の課題に対し、万能鋼板設置後に調査を行う等、騒音・砂塵の影響を考慮し、安全かつ適切な調査方法の検討を行いながら発掘調査を進める必要があった。また、試掘調査の成果によって掘削深度が2m以上になることが想定されたことから、保護すべき範囲を適切に記録するため、調査区の南北は地権者の協力を得て借地を行い、安全勾配をつけて掘削を行った。

第3節 発掘調査の経過

西下条五割遺跡は、中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴い、令和4年度から令和5年度にかけて発掘調査を実施した。記録保存のため発掘調査（以下、「本調査」という。）は、山梨県埋蔵文化財センター調査研究課が主体となり、調査の計画については岩永が担当し調査計画案を作成した。また、現場作業に関しては、岩永、秋山（令和4年度）、熊谷、鷹野、秋山（令和5年度）の体制で調査を進めた。

本調査に係る作業に先立ち、令和5年1月25日より発掘調査の拠点となる作業ヤードの仮囲い設置、作業員休憩所、現場事務所等の施設設置、発電機等の機材搬入を行った。

砂塵、騒音を考慮し、令和5年2月2日より調査区及び作業ヤード北面・南面に調査は万能鋼板を設置。なお保護すべき範囲を適切に記録するため、調査区の南北は地権者と現地にて境界立ち会いを行い、借地を行った。また、2月3日に丁張りを設置した。

表土掘削は2月6日から2月20日の10日間で、オペ付きバックホウを用いて実施した。表土掘削にあたっては、試掘調査の結果より掘削深度が2m以上となることが予想されたため、安全勾配をつけての掘削とし、地表下約2mにおいて小段を設けた。

表土掘削と並行して、山梨県埋蔵文化財センターで2月6日より任用した発掘作業員、及び2月15日よりシルバー人材センターから派遣された作業員によって調査区の壁清掃、遺構検出作業等を順次実施していった。なお、調査中における掘削土に関して、運搬及び排土成形は技能員に業務委託を行っており、掘削土は調査区東側の作業ヤード内にて保管を行った。

2月28日には4級基準点測量及び国土座標杭の打設を実施。調査の結果、計3面の畦畔を伴う水田跡が確認され、検出した遺構・遺物の3次元情報は借り上げた光波測距儀や職員の手作業によって記録した。遺構完掘後、3月1日、3月15日、3月31日にそれぞれの遺構面の空中写真撮影・写真測量を委託により実施した。また、各遺構面間の間層については、第1面から第2面にかけては人力、第2面から第3面にかけては重機により掘削を行った。

第3面の空中写真撮影・写真測量終了後、第3面下層の掘削、記録作業を実施した。記録作業終了後、4月7日から4月21日にかけて埋め戻しを行った。4月27日に現場事務所、発電機等の撤収、万能鋼板の撤去を完了。本調査におけるすべての現場作業を終了した。

第4節 室内作業等の経過

西下条五割遺跡の整理作業は、本調査終了後の令和5年5月から令和6年3月15日の期間で行った。なお今回の本調査にて出土した遺物はプラスチック収納箱2箱分である。

令和5年5月から9月にかけては記録類の整理を行った他、出土金属製品の保存処理を公益財団法人山梨文化財研究所、採取炭化物の理科学分析をパレオ・ラボ株式会社に業務委託し、報告書刊行準備を進めた。

報告書刊行に伴う整理作業は令和5年下半年より開始した。令和5年10月13日～12月27日まで1名の整理作業員を任用し、出土遺物の洗浄・注記・実測、また出土遺物の写真撮影、実測図のデジタルトレース作業等を実施した。並行して報告書の執筆・図版作成等の作業を実施し、令和6年3月15日に『西下条五割遺跡』として発掘調査報告書を刊行した。



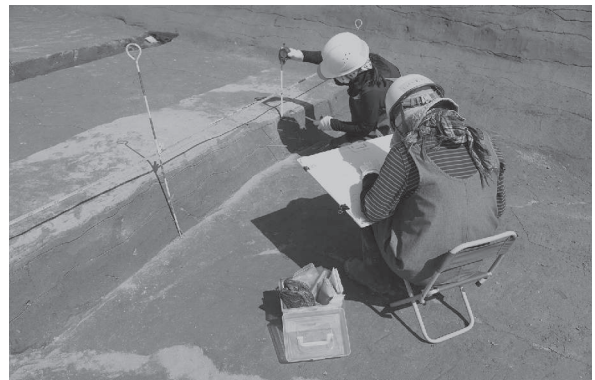
重機による表土掘削作業



手作業による遺構検出作業



委託による測量作業（空撮）



手作業による記録作業

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

山梨県は、日本列島の本州中央部に位置する内陸県である。西下条五割遺跡の所在する山梨県甲府市は、山梨県の中央部に位置し、南北 31.5km、東西 12.5km の南北に細長い長方形を呈する。市域は、北部が金峰山を主峰とする秩父山地の高山帯であり、奥秩父国師ヶ岳を源流をとする荒川の急流により、中央部に至る野猿谷、御岳昇仙峡などのV字谷を形成する。また市域南部には沖積地が広がっており、県中央部に展開する甲府盆地の一角をなす。甲府盆地は、荒川・釜無川・相川がつくった扇状地、東南部の低地に細分され、この中でも西下条町は、笛吹川畔から濁川・高倉川の合流地点にかけてを中心とする東南部低地内に当たる。本遺跡は、南都留郡富士河口湖町を起点とする国道 358 号と中央高速道路の交点から南東に約 350 m 離れた甲府南部工業団地西下条地区内、標高約 253 m の氾濫原上に立地する。

周辺の河川については、遺跡西部に甲府市を南流する荒川が流れ、東部に新五割川が流れる。また、笛吹川と荒川の合流点にも近く、周辺はこれらの河川の氾濫による土砂が堆積した後背湿地が発達している。このような地理的条件から、現在でもしばしば水路の溢流が見られる地域である。

地質的にみると、甲府盆地は富士川水系釜無川と笛吹川、及びその支流が氾濫した土石の複合した複合扇状地であり、基盤となる花崗岩、安山岩の上部を、砂礫を主とする厚い沖積物が覆う。

なお、気候は冬と夏の寒暑の差が激しい典型的な内陸性気候である。

第2節 歴史的環境

甲府市は低平な甲府盆地底部から北部の高山帯まで幅広い地域で構成されており、展開された歴史についても同様に多様であるといえる。本節ではその中でも、西下条五割遺跡が位置する甲府盆地南部に目を向け、周辺の遺跡分布図を第2図、第1表に示す。

甲府市南部に人々の活動が見られ始めるのは、旧石器時代であると推察される。立石遺跡(76)、米倉山A遺跡(82)において旧石器時代の石器と細石核が出土しており、曾根丘陵上における生活の痕跡を見ることができる。

また、縄文時代には、同じく丘陵上の前付遺跡において草創期の槍先形尖頭器が遺構外から出土した。同遺跡で集落が展開するようになったのは中期中葉ごろからであると推察されるが、この他、周辺の上の平遺跡、立石遺跡、下向山遺跡で縄文の遺跡が発見されており、縄文時代前期末～中期中葉ごろの集落が曾根丘陵上で展開していたものと考えられる。

弥生時代の遺跡の発掘調査事例は少ないものの、これは山梨県内全域に目を向けても同様である。当該期の遺跡は笛吹川右岸地域でも見られるが、人々の活動の実態については不明な点が多い。しかしながら、曾根丘陵上の上の平遺跡では 120 基を超える弥生時代後期後半の方形周溝墓が見つかった例が存在する。

古墳時代に至ると、4世紀代には古墳の築造が開始する。甲斐銚子塚古墳(64)をはじめとする前方後円墳は、ヤマト政権と関わる甲府盆地有力者が築いた巨大墳墓であり、5世紀から6世紀にかけて甲府盆地一円に勢力を拡大したものとみられる。6世紀後半には、笛吹川御坂町の姥塚古墳や甲府市湯村の加牟那塚古墳など、甲府盆地の東西に大型の横穴式石室を持つ円墳が築かれるようになり、勢力が分散するようになる。また近年の調査事例として、北畑南遺跡(23)では地表下5mから古墳時代中期の住居跡が発見され、甲府盆地低地における集落の存在が明らかとなった。

大化の改新以降、律令制の下甲斐国が建置されると、甲斐国は甲府盆地を中心に山梨・八代・巨摩郡に分けられることとなった。調査事例は少なく実態は判然としないものの、外河原デクヤ遺跡(6)では9世紀後半から10世紀のものともみられる竪穴建物、掘立柱建物が見つかり、低地における居住空間

が存在していたことがうかがえる。また、地図上から西に外れるが、中央市旧玉穂町の上窪遺跡や平田宮第2遺跡では水田跡が発見された。

中世になると笛吹川右岸地域での活動痕跡がより強くみられるようになる。本遺跡から北東に約1.5km離れた甲府市落合地域では、南北に伸びる自然堤防上に落合氏館跡(24)、小曲氏館跡(26)、今井氏館跡(21)等の中世土豪族屋敷の伝承地が点在している。また、近年の調査事例では、甲府市落合地域で2020年に実施した田通遺跡(25)・福部遺跡(22)の調査では、中世の畝状遺構や畑跡とみられる遺構が検出された。この他、本遺跡の西部、甲府市大津町の大津天神堂遺跡(38)、中央市の二又第一遺跡(2)では中世の集落跡が見つかっており、中世村落の実態の検討が待たれる。

近世において西下条の名は、西下条村として慶長古高帳に村名がみえ、高六五五石余、寺社領分は下条村として八幡領五石余、ほかに由緒不明であるが、現盛院領一六五余の記載がある。また貞享二年(1685)の検地帳によれば、耕地の6割以上が田であり、中田以上も約6割であった。

近代に入ると西下条村は明治7年に大津町と合併、二川村となり、昭和29年の甲府市に合併し今に至る。現在の西下条町地区には甲府市南部工業地帯西下条地区が置かれており、遺跡周辺には工場が立ち並び、また新山梨環状道路、国道358号が南北に通い、交通の要衝地となっている。

以上、甲府市南部の歴史的環境を概観したが、特に古墳時代以前までは曾根丘陵上に遺跡が集中し、西下条五割遺跡周辺の低地においては遺跡数が限定されることが見て取れる。現段階において甲府市南部の低地における埋蔵文化財調査の調査事例は少ないものの、前述の中世土豪族屋敷の伝承地の存在や近年の調査成果から、盆地底部でも人々の活動があったことをうかがうことができ、今後の調査・検討とともに当該地域の人々の動態がより鮮明となっていくことが予想される。

1993 甲府市市史編さん委員会編 『甲府市史 別編Ⅲ 甲府の歴史』

1989 甲府市市史編さん委員会編 『甲府市史 資料編 第一巻』

1995 平凡社『山梨県の地名 日本歴史地名大系第19巻』

2022 山梨県埋蔵文化財センター 『福部遺跡・田通遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告335

2023 末木 健 『古代甲斐国の考古学』 高志書院



第2図 西下条五割遺跡周辺遺跡分布図

第1表 西下条五割遺跡周辺遺跡一覽表

番号	遺跡名	時期	種別
1	西下条五割遺跡	中世 / 近世	
2	二又遺跡	弥生 / 古墳 / 奈良 / 平安	包蔵地
3	住吉天神遺跡	古墳 / 奈良 / 平安	散布地
4	上ノ木遺跡	古墳 / 奈良 / 平安	散布地
5	宮田遺跡	弥生 / 古墳 / 奈良 / 平安	散布地
6	外河原子クヤ遺跡	古墳 / 奈良 / 平安	散布地
7	明石・西河原遺跡	平安	散布地
8	御所遺跡	中世	城館跡
9	小宮山土佐守屋敷跡	中世	城館跡
10	大土井遺跡	平安	散布地
11	上町天神遺跡	古墳 / 奈良 / 平安	散布地
12	土尻遺跡	中世	散布地
13	福王寺遺跡	中世	散布地
14	小瀬氏館跡	中世	城館跡
15	大北耕地遺跡	中世 / 近世	散布地
16	東耕地遺跡	平安 / 中世	散布地
17	桜林 A 遺跡	古墳 / 奈良 / 平安 / 中世	散布地
18	桜林 B 遺跡	平安 / 中世	散布地
19	西耕地遺跡	中世以後	散布地
20	堰添遺跡	奈良 / 平安	散布地
21	今井氏屋敷跡	中世	城館跡
22	福部遺跡	中世	集落跡
23	北畑南遺跡	古・平・中世	集落跡
24	落合氏屋敷跡	中世	城館跡
25	田通遺跡	中世	田畑跡
26	小曲氏屋敷跡	中世	城館跡
27	砂間遺跡	平安 / 中世	包蔵地
28	堀の内遺跡	中世	城館跡
29	村前遺跡	中世	散布地
30	金山遺跡	中世	散布地
31	高室氏館跡	中世	城館跡
32	北河原遺跡	中世 / 近世	散布地
33	二又第 1 遺跡	平安 / 中世 / 近世	散布地
34	二又第 2 遺跡	平安 / 中世 / 近世	散布地
35	高室流し遺跡	中世、近世	水田
36	北河原遺跡	中世 / 近世	散布地
37	神明遺跡	中世 / 近世	散布地
38	大津天神堂遺跡	中世	集落跡、田畑跡
39	入田遺跡	中世	田畑跡
40	大津横田遺跡	中世	田畑跡
41	大津村添遺跡	中世	
42	壱丁田遺跡	平安	散布地
43	下河原第 1 遺跡	中世 / 近世	散布地
44	下河原第 2 遺跡	中世 / 近世	散布地
45	村添遺跡	平安 / 中世	散布地
46	下首根橋下遺跡	弥生 / 古墳	散布地
47	勝山城跡	中世	城跡

番号	遺跡名	時期	種別
48	無名墳	古墳	古墳
49	無名墳	古墳	古墳
50	無名墳	古墳	古墳
51	朝日遺跡	弥生 / 古墳	散布地・古墳
52	天神山塚古墳	古墳	古墳
53	無名墳	古墳	古墳
54	物見塚遺跡	縄文 / 弥生 / 平安	散布地
55	物見塚古墳	古墳	古墳
56	飯溝遺跡	中世 / 近世	散布地
57	北ノ山遺跡	縄文 / 弥生 / 古墳	散布地
58	天神遺跡	縄文 / 弥生 / 平安	集落跡
59	考古博物館構内古墳	古墳	古墳
60	岩清水遺跡	弥生 / 古墳 / 平安	集落跡・古墳
61	杯塚古墳	古墳	古墳
62	かんかん塚古墳	古墳	古墳
63	丸山塚古墳	古墳	古墳
64	銚子塚古墳	古墳	古墳
65	大丸山古墳	古墳	古墳
66	東山北遺跡	縄文 / 弥生 / 古墳	集落跡
67	鍋弦塚古墳	中世墳墓	古墳
68	稲荷塚古墳、狐塚古墳	古墳	古墳
69	無名墳	古墳	古墳
70	無名墳	古墳	古墳
71	東山南遺跡	弥生 / 古墳	集落跡
72	上ノ平遺跡	縄文 / 弥生 / 古墳 / 平安	集落跡
73	宮の上遺跡	不明	
74	熊久保遺跡	弥生	散布地
75	馬乘窪遺跡	弥生 / 古墳	散布地
76	立石遺跡	旧石器 / 縄文 / 弥生 / 古墳	集落跡
77	馬場遺跡	縄文 / 弥生 / 古墳	散布地
78	女沢 A 遺跡	弥生 / 古墳	散布地
79	女沢 B 遺跡	弥生 / 古墳	散布地
80	金塚古墳	古墳	古墳
81	女沢 C 遺跡	弥生 / 古墳	散布地
82	米倉山 A 遺跡	旧石器 / 縄文 / 弥生 / 古墳	散布地
83	菖蒲池遺跡	旧石器 / 縄文 / 弥生 / 古墳	散布地
84	無名墳	古墳	古墳
85	無名墳	古墳	古墳
86	無名墳	古墳	古墳
87	小平沢古墳	古墳	古墳
88	小平沢遺跡	古墳 / 平安	散布地
89	米倉山 B 遺跡	旧石器 / 縄文 / 弥生 / 古墳	集落跡
90	天神山古墳	古墳	古墳
91	金沢天神遺跡	縄文 / 弥生 / 古墳	散布地
92	明治遺跡	近世	包蔵地
93	地藏田遺跡	近世	包蔵地

第3章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

今回の本調査に当たっては、令和4年3月に実施した試掘調査の成果に基づき発掘区の設定を行った。試掘調査では中世～近世のものと考えられる水田跡が計3面捉えられたが、出土遺物については小破片のものが少量出土したのみであったため、明確な時期の特定が困難であった。当該地域周辺では遺跡の発掘調査事例が少なく、土層堆積に留意しながら、調査計画を立案した。

発掘調査に当たっては重機により第1面の遺物包含層まで掘削したのち、調査区に国土座標に基づく三次元座標の基準杭を3点設置した。

遺構の調査は、畦畔の様に地面に突出したものと溝の様に掘りこまれるもの両者が検出される可能性を踏まえ、人力により精査を行った。畦畔については、上面を平面プランで確認した後に床土層まで掘り下げを行い、足跡・水口は平面プラン確認後半裁を行った。なお、今回の調査で確認された畦畔は全て調査区を横断していたため、畦畔の土層は壁面観察を基本とした。土層断面を観察・実測図化・写真撮影を実施したのちは、完掘して写真撮影、平面図の作成を行った。また、各遺構面の間層は、第1面から第2面にかけては人力により、第2面から第3面にかけては重機を使用し掘削を行った。

遺物については、極力遺跡内における原位置を保つことを原則とし、光波測距儀と遺跡管理システム(『遺構くん』)により位置情報の記録をとった。なお遺物の取り上げにあたっては、土器(P)、石製品(S)、鉄製品(F)、木製品(W)、として取り上げた。

調査の進捗状況および発見された遺構や遺物の確認状況などは、デジタル一眼レフカメラ(ニコンD850)により撮影した。空中写真撮影については、遺構の完掘状況や位置の把握を目的とした上方俯瞰写真のほか、景観の把握を目的として四方を望むアングルにより撮影した。

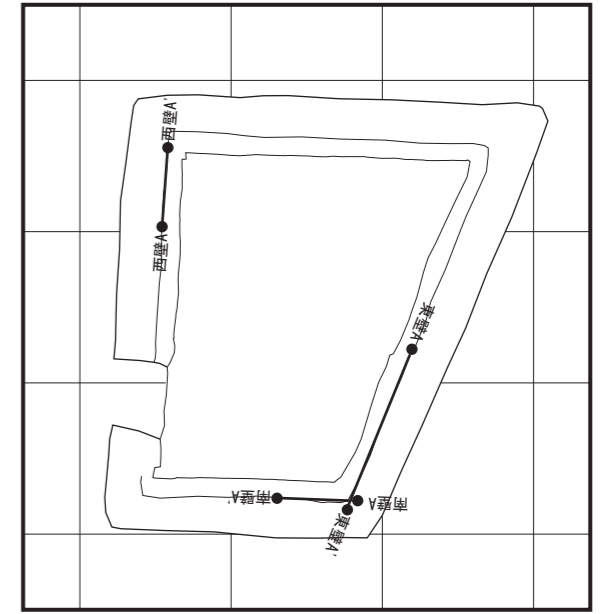
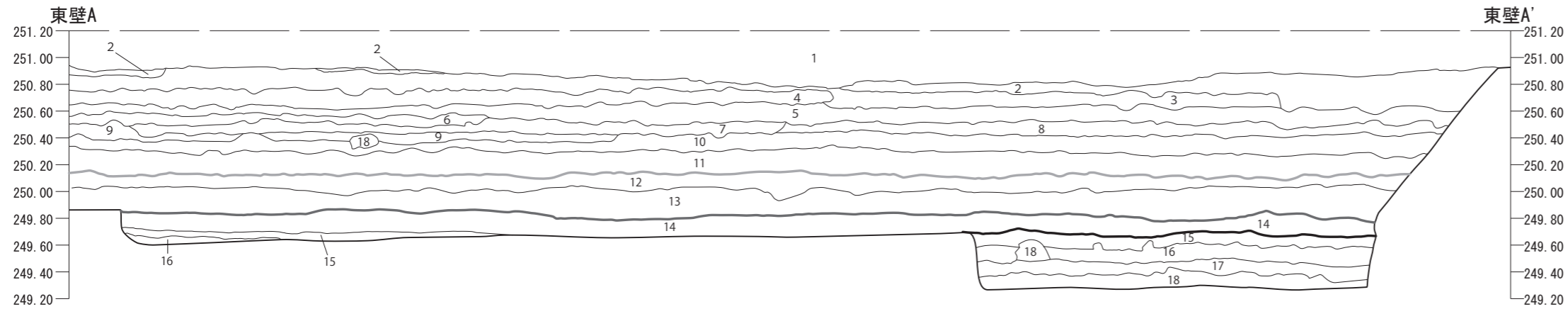
第2節 基本層序

調査から得られた層序については、第3図にまとめた。壁面の層所を基本とし、作成した地点は同図内に示す。地点により地山層が変化することから、各壁面に層所番号を振り、土層観察の結果を付した。また土層観察の結果を踏まえ、今回の調査で確認された計3面の生活面をそれぞれ太線にて表す。

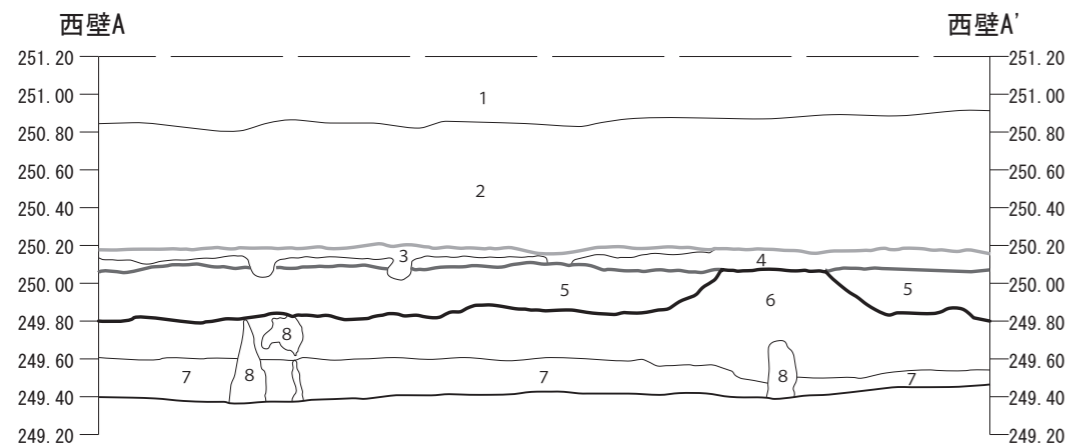
本遺跡は笛吹川及び荒川が作出した氾濫原上に位置し、遺跡の埋没過程において何層にも渡る洪水の痕跡が認められた。表土である攪乱層は2.9～3.1mであり、近年の造成に伴うものとみられる。表土直下から第1面に当たる江戸3期までの層には細砂層及び中粒砂層が堆積しており、一部鉄分沈着が認められた。このことから、近現代以降も耕作が行われていたものと推察される。また第1面直上の砂層でラミナ構造が見られ、江戸3期水田面については洪水によって耕作が中断したものと考えられる。

第1面より下層については、水田耕作における床土とみられる土壌化層と、砂層との互層が続く様子が見られる。砂層においてはラミナ構造が発達しており、当該地域において幾度となく洪水があったことを示す。また、計3面の生活面の下層には白色粗砂が堆積しており、噴砂の供給源となっている。

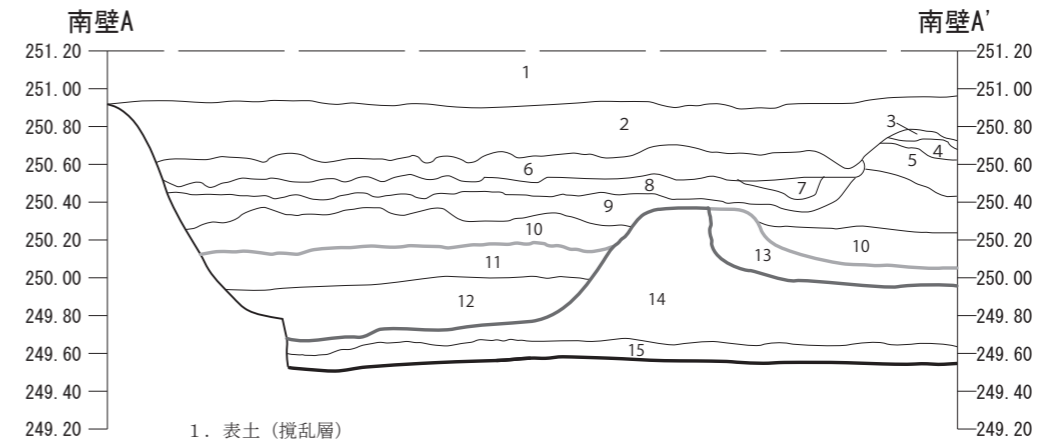
以下、本報告において、第3面を江戸1期、第2面を江戸2期、第1面を江戸3期として報告する。



- 1. 表土 (攪乱層)
- 2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 細砂 締り強 粘性強
- 3. 10YR3/4暗褐色砂質土 極細砂 締り強 粘性やや弱 鉄分混じる
- 4. 10YR3/2黒褐色粘質土 締り弱 粘性強 炭化物少量混じる
- 5. 10YR4/1褐灰色砂層 細砂～中粒砂 締りやや強 粘性弱 赤色の砂粒が混じる (中粒砂)
- 6. 10YR4/3にぶい黄褐色砂層 細砂 5層より砂粒分大きい 締りやや弱 粘性弱
- 7. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土 細砂 締りやや弱 粘性強 灰色ブロックが混じる
- 8. 10YR3/2黒褐色砂質土 細砂 締りやや強 粘性強 炭化物微量混じる
- 9. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 中粒砂 締りやや強 粘性やや弱 φ5mm台の白色礫ごく微量混じる
- 10. 10YR5/2灰黄褐色砂質土 細砂 締り強 粘性強
- 11. 10YR4/2灰黄褐色砂層 細砂 締り弱 粘性強 ラミナ構造
- 12. 10YR3/3暗褐色粘土質 (砂質シルト) 極細砂 締りやや強 粘性強 炭化物少量含み、鉄分混じる
- 13. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 細～中粒砂 締りやや強 粘性強 炭化物少量含み、鉄分12層より多く含む
- 14. 10YR4/2灰黄褐色シルト質層 細砂 締りやや強 粘性やや強 炭化物少量含み、鉄分13層と同じ
- 15. 10YR4/1褐灰色砂質土 細砂 締り弱 粘性弱 礫φ20mm以下 炭化物少量含む シルトブロック含む
- 16. 10YR4/2灰黄褐色砂層 粗砂 締り弱 粘性弱 礫φ5mm以下多く含む
- 17. 10YR4/2灰黄褐色砂層 粗砂 締り弱 粘性弱 礫φ5mm以下多く含む
- 18. 白色砂層 極粗砂～小礫 北から南に向かってラミナ発達 礫φ～8mm 河川氾濫

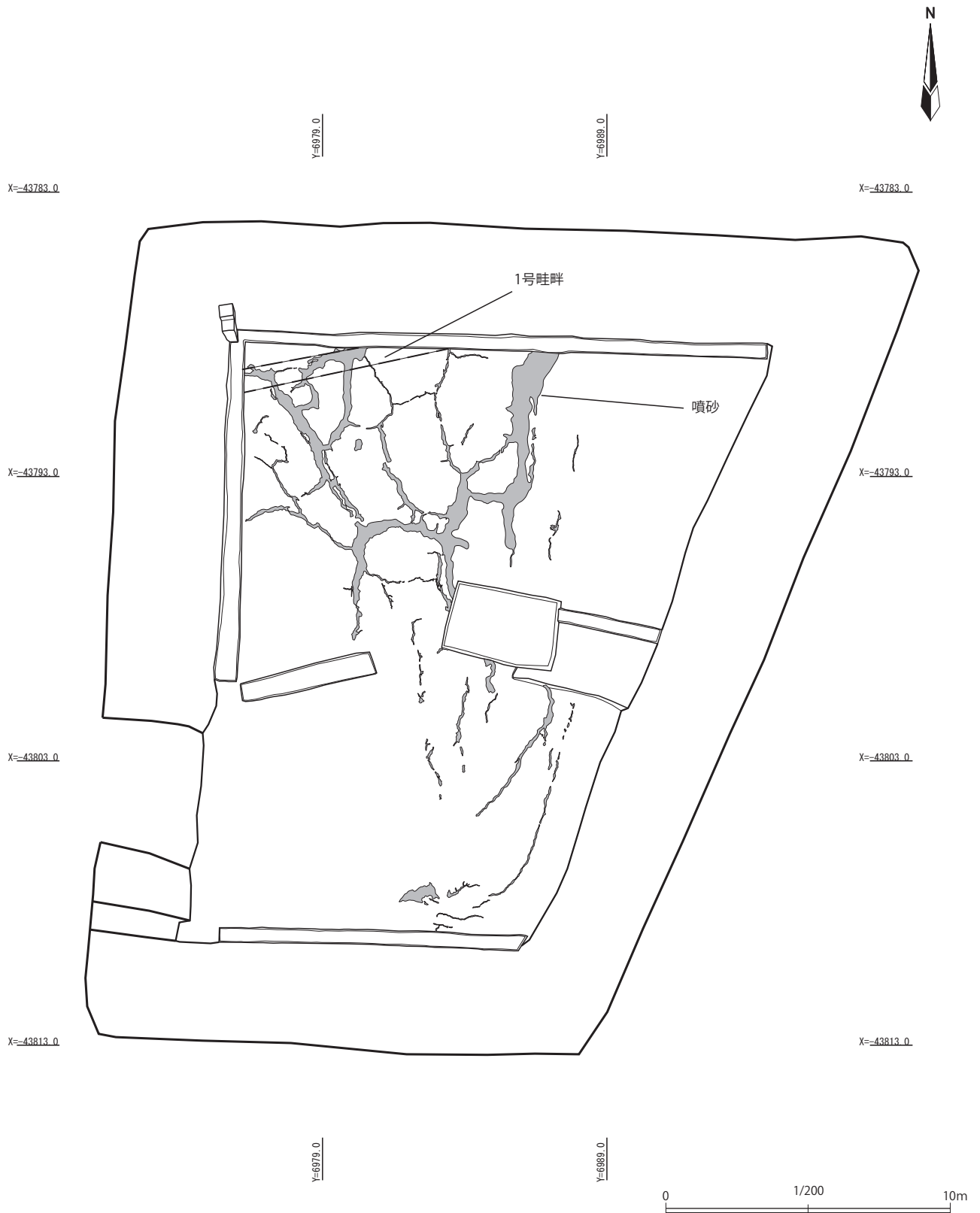


- 1. 2.5Y5/3黄褐色細砂 締り強 粘性やや強 炭化物、鉄分やや含む
- 2. 2.5Y5/3黄褐色細砂 締り強 粘性やや強 炭化物、鉄分やや含む
- 3. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂 締りやや弱 粘性やや強 微細な炭化物含む
- 4. 2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂 締り強 粘性やや強 緩やかラミナ含む 炭化物やや含む
- 5. 2.5Y5/3黄褐色細砂 締り強 粘性やや強 炭化物、鉄分やや含む
- 6. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じり中粒砂 締りやや強 粘性やや強 炭化物部分的に含む 植物根含む 全体的に酸化している
- 7. 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂混じり中粒砂 締り強 粘性やや弱 弱いラミナ含む 炭化物わずかに含む
- 8. 白色砂層 粗砂主体

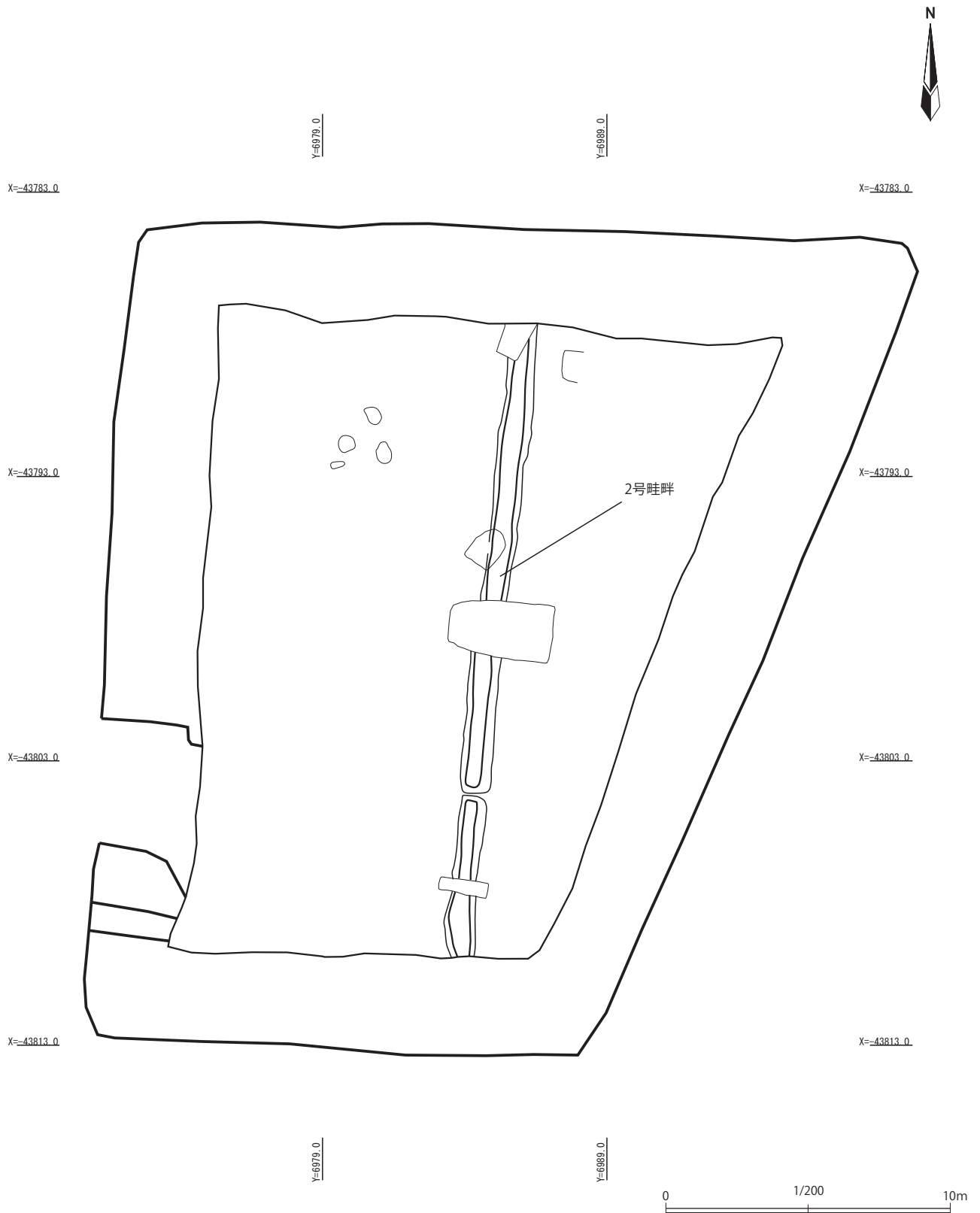


- 1. 表土 (攪乱層)
- 2. 東壁2層と同
- 3. 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 締りやや強 粘性弱 やや乱れたラミナ 酸化している
- 4. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂 締りやや強 粘性やや強 酸化している
- 5. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂 締りやや強 粘性弱 酸化している
- 6. 東壁6層と同
- 7. 10YR3/3暗褐色細砂 締りやや強 粘性やや強 上部酸化している
- 8. 東壁8層と同
- 9. 東壁10層と同
- 10. 東壁11層と同
- 11. 東壁12層と同
- 12. 東壁13層と同
- 13. 2.5Y4/6オリーブ褐色細砂 締りやや強 粘性強 鉄分多く含む 1mm程度の小礫やや含む
- 14. 東壁14層と同
- 15. 東壁15層と同

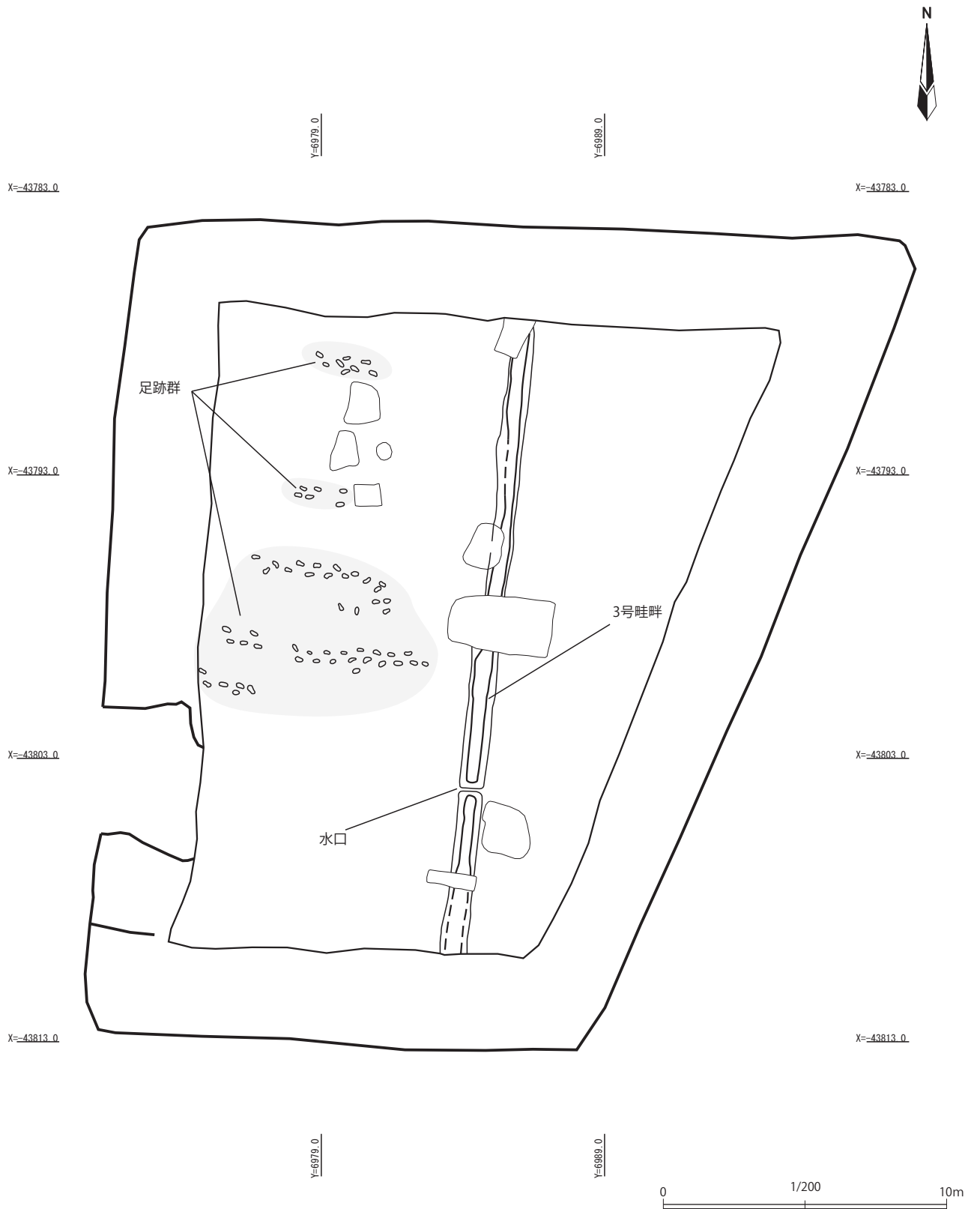
第3図 調査区土層図



第4図 遺構配置図（江戸1期）



第5図 遺構配置図（江戸2期）



第6図 遺構配置図（江戸3期）

第3節 発見された遺構

(1) 江戸1期

江戸1期の遺構として、1条の畦畔を確認した。この他、人為的ではないものの、噴砂が本遺構面を貫入している様相が見られた。これについて、江戸1期の水田に係るものとして、本節で扱う。

・1号畦畔（第3・4図 写真図版2）

調査区北側に位置し、大半が調査区外に入る。平面プランでの確認ができず、調査区西壁及び北壁壁面のみでの検出となった。西南西―東北東に主軸をとるものと推定される。断面形態は台形状であり、下端幅約60cm、高さ約30cmを図る。上面が江戸2期の遺構面に当たるため、耕作時から削平され、高さを減じている可能性がある。畦畔を隔てた水田面の高低差は確認できず、水田面の広さは不明である。

・噴砂（第7図 写真図版2）

調査区全域で確認されたが、北半を主として分布し、傾向として南北に砂が走る様子が見られる。江戸1期遺構面を貫入して上層まで白色粗砂が吹き上がっているため、水田埋没後に当該地域周辺で地震が発生し、液状化現象に伴い白色粗砂が吹き上がったものと考えられる。

(2) 江戸2期

江戸2期の遺構として、1条の畦畔を確認した。

・2号畦畔（第4・7図 写真図版4）

調査区やや東よりに位置し、両端は調査区外に延伸する。主軸は概ね南北方向である。断面形態台形は丸角の台形型と推定されるが、西側が後の耕作により削平されており、下端幅は不明である。

(3) 江戸3期

江戸3期の遺構として、1条の畦畔、畦畔上に作出された水口1カ所、足跡群を確認した。

・3号畦畔（第7図 写真図版4）

調査区やや東よりに位置し、両端は調査区外に延伸する。2号畦畔を作り直したと推察され、断面形態台形は丸角の台形型であり。下端幅約80cm、高さ約25cmを図る。

・水口（第7図 写真図版4）

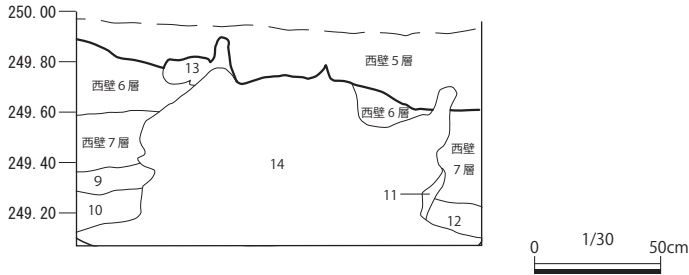
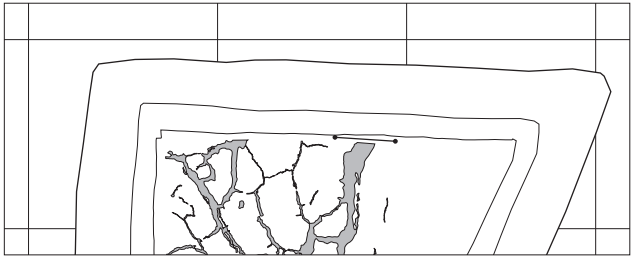
調査区南側、2号及び3号畦畔上に位置する。畦畔を隔てての水田の高低差から、西から東に向かって水を流す機能があったと推察される。畦畔上面からの掘りこみの深さは約20cmであり、埋土は砂を基本とし、水流による土砂堆積とみられる。

・足跡群（第7図 写真図版4）

調査区西北に分布する。3号畦畔の西側において、畦畔に直行する形で東から西に向かって歩行する様子が見られた。足跡の深さは約4cmであり、埋土として極細砂が堆積する。

噴砂

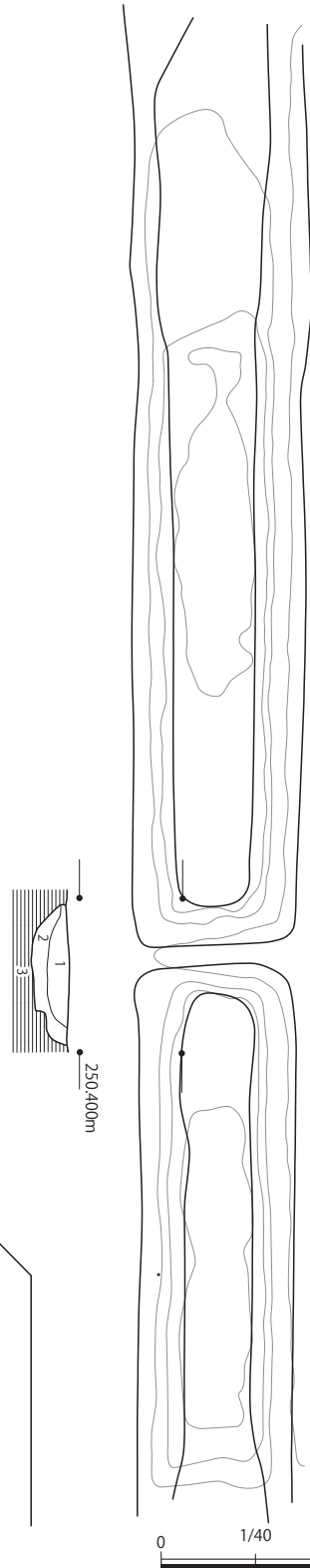
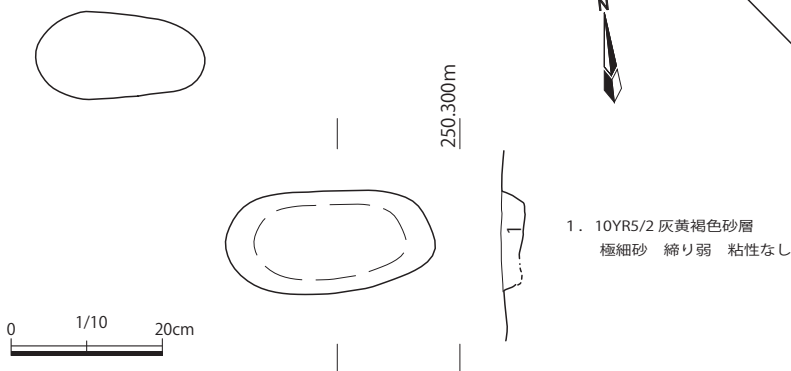
水口 (2号畦畔・3号畦畔)



- 9. 10YR4/2 灰黄褐色砂層 細砂 締り弱 粘性弱
- 10. 10YR6/1 褐灰色砂層 中砂～粗砂 締りなし 粘性なし 白色砂が縞状に堆積
- 11. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト層 細砂 締り強 粘性強 炭化物含む
- 12. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂層 細砂～中砂 締り弱 粘性なし 鉄味を帯びた砂が縞状に堆積
- 13. 白色砂層 (細砂) 締りなし 粘性なし 噴砂痕 シルトブロック含む
- 14. 白色砂層 粗砂主体 噴砂

- 1. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂層 細砂 締り弱 粘性なし 鉄分混じり炭化物微量含む
- 2. 10YR5/2 灰黄褐色砂層 極細砂 締り弱 粘性なし
- 3. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 締りやや強 粘性強 細砂粒等が混じる 鉄分含む

足跡群



第7図 噴砂及び個別遺構図

第4節 発見された遺物（第11図）

発掘調査において出土した遺物には、近世までの土器・陶磁器、石製品、金属製品があった。出土遺物では残存率50%以上の土器、陶器の出土は見られず、小破片であった。また、本遺跡では溝や土坑等の掘りこみを伴う遺構が見られなかったため、遺物は各水田面直上、及び包含層からの出土である。なお江戸3期においては、土器・陶器の細片資料が数点出土したのみであり、図化可能資料は出土していない。

（4）江戸1期

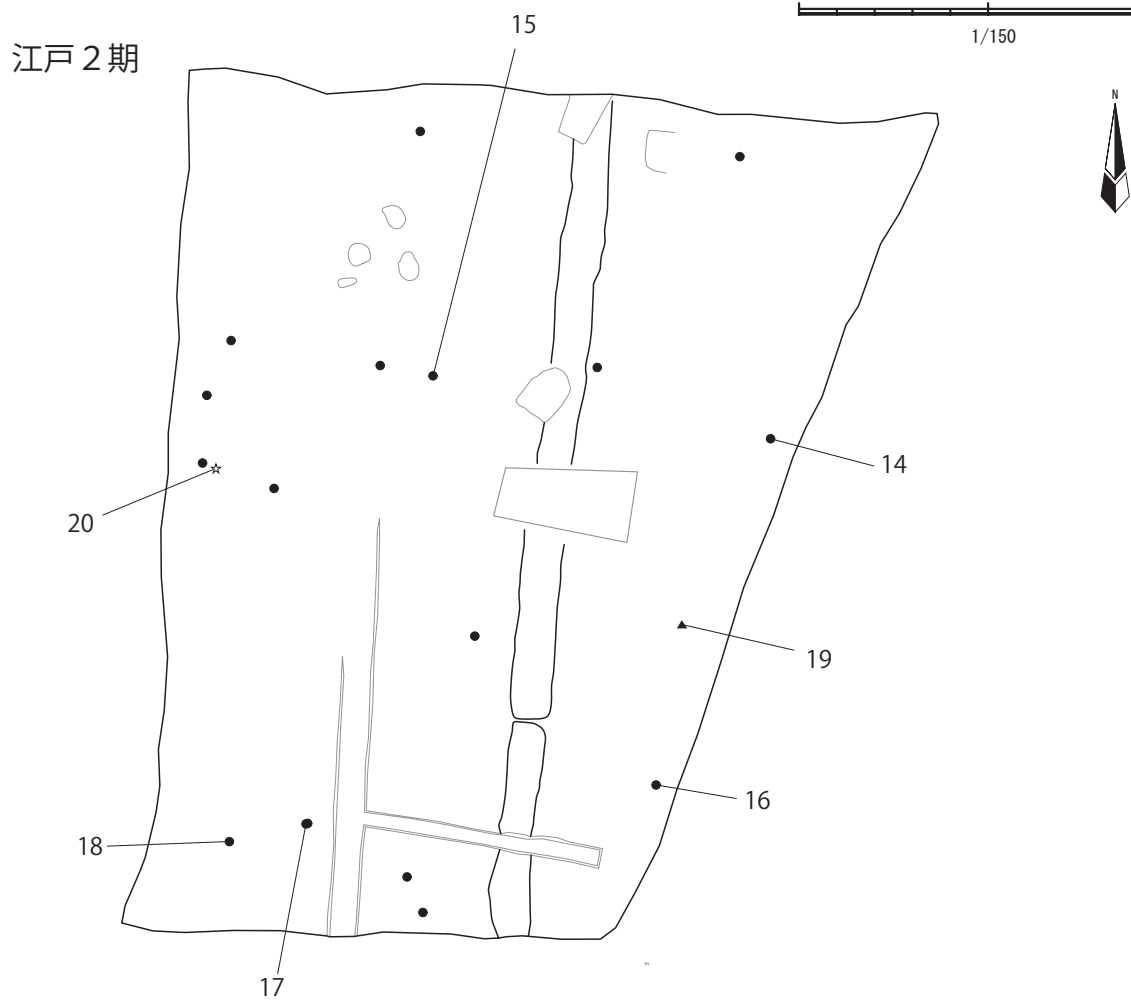
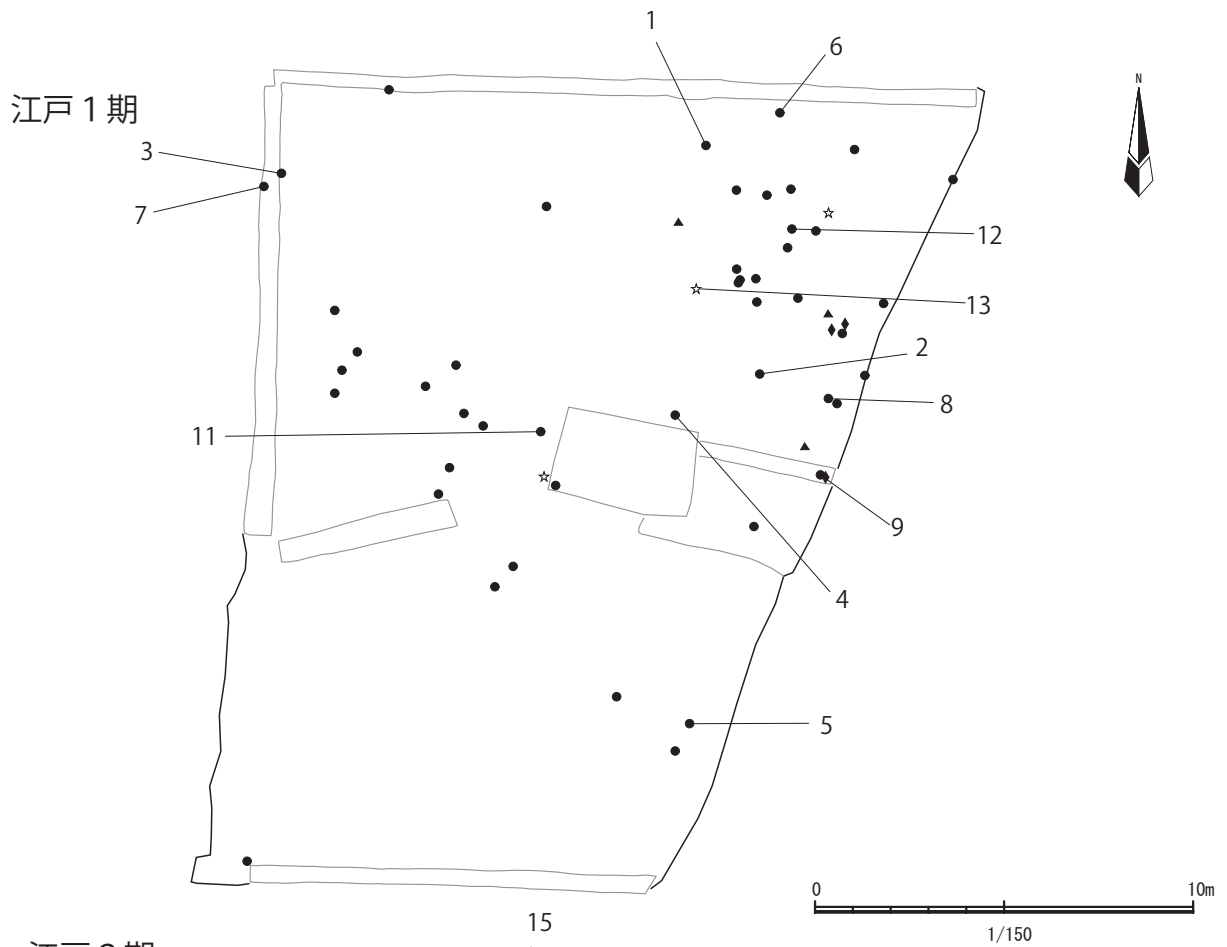
1～13は江戸1期包含層より出土した。

1～6はかわらけである。底部資料については回転糸切。いずれも17世紀以降のものと思われる。7は焙烙鍋である。18世紀代か。8は内耳鍋の口縁部である。9は丸型の猪口であり、外面には素描により文様が描かれる。10は碗類か。口縁端がやや外反する。11は碗の体部か。内外に透明釉。12は皿類の口縁部か。口縁端部がやや外反する。13は轡形の金属製品であり、円環状の金具と鎖状の金具からなる。鉄製。鎖状の金具については、八の字状を呈する2連の小円環のそれぞれに、金属部品が連なる。

（5）江戸2期

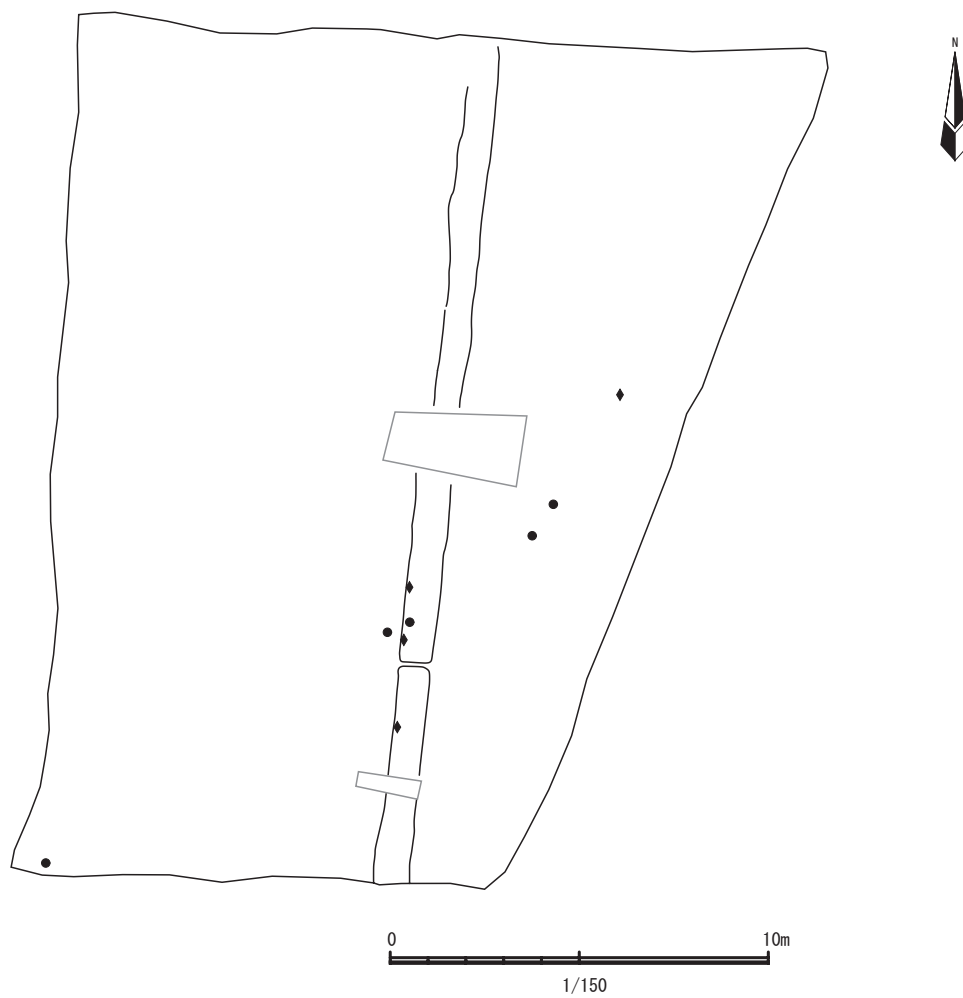
14～20は江戸2期包含層より出土した。

14は鍋類の口縁部である。15は陶器の鉢・甕類の底部か。16・17は耳付の茶入れである。外面に灰釉。17は高台削り出し。18は半筒碗である。外面に素描きの菊花紋が描かれる。19は安山岩製の凹石である。20はキセルの吸い口である。銅製。

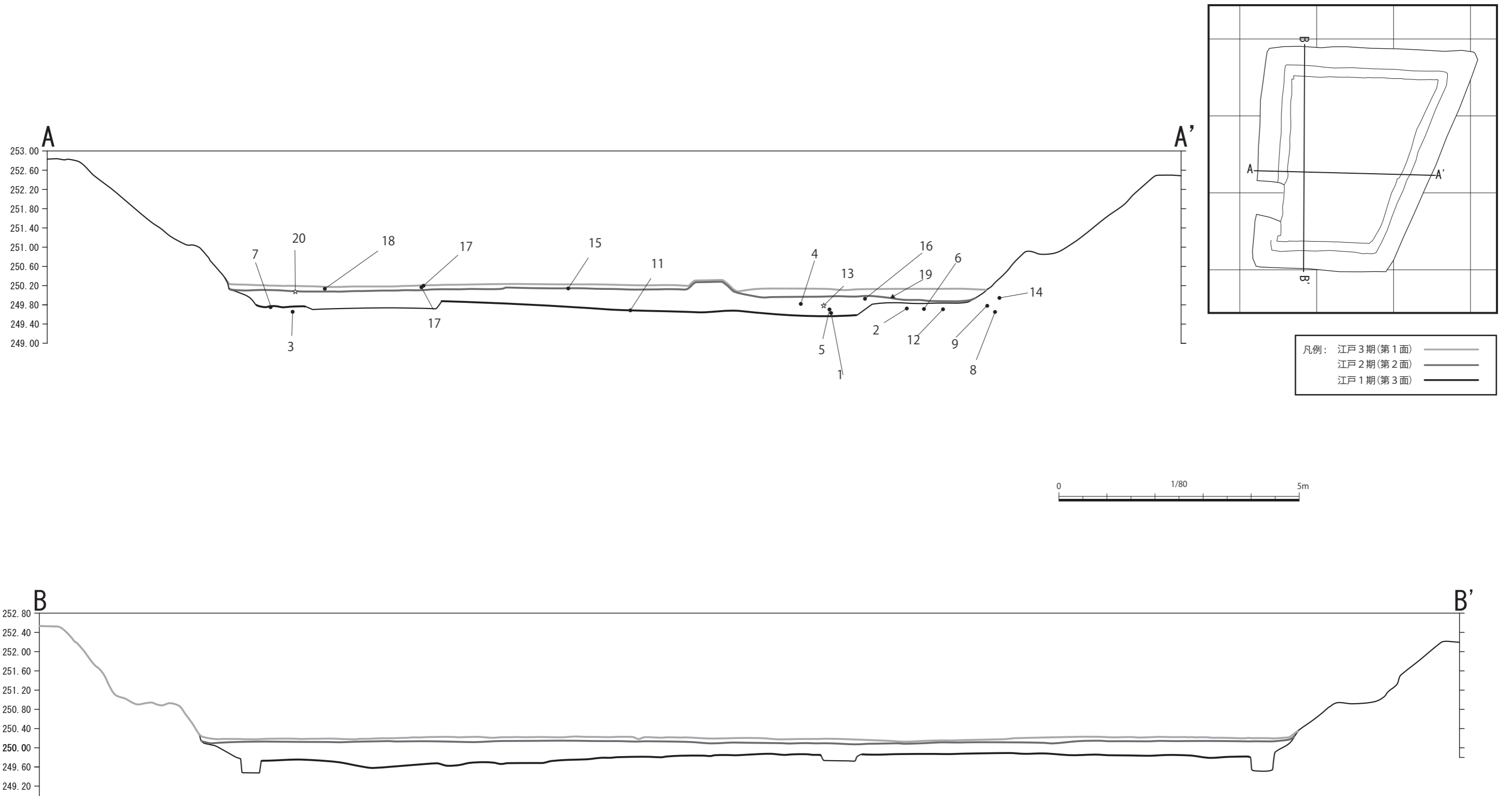


第8図 遺物分布図(1)

江戸3期

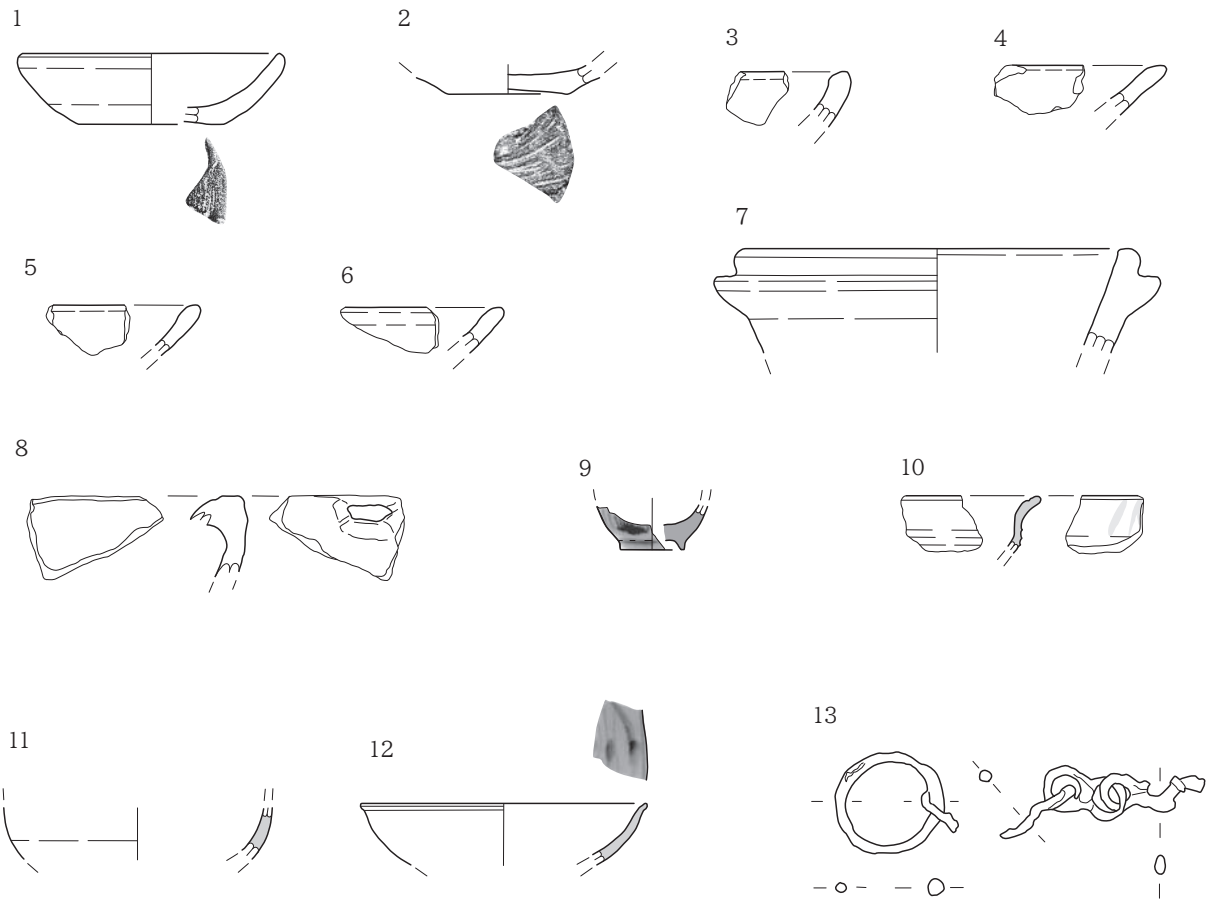


第9図 遺物分布図(2)

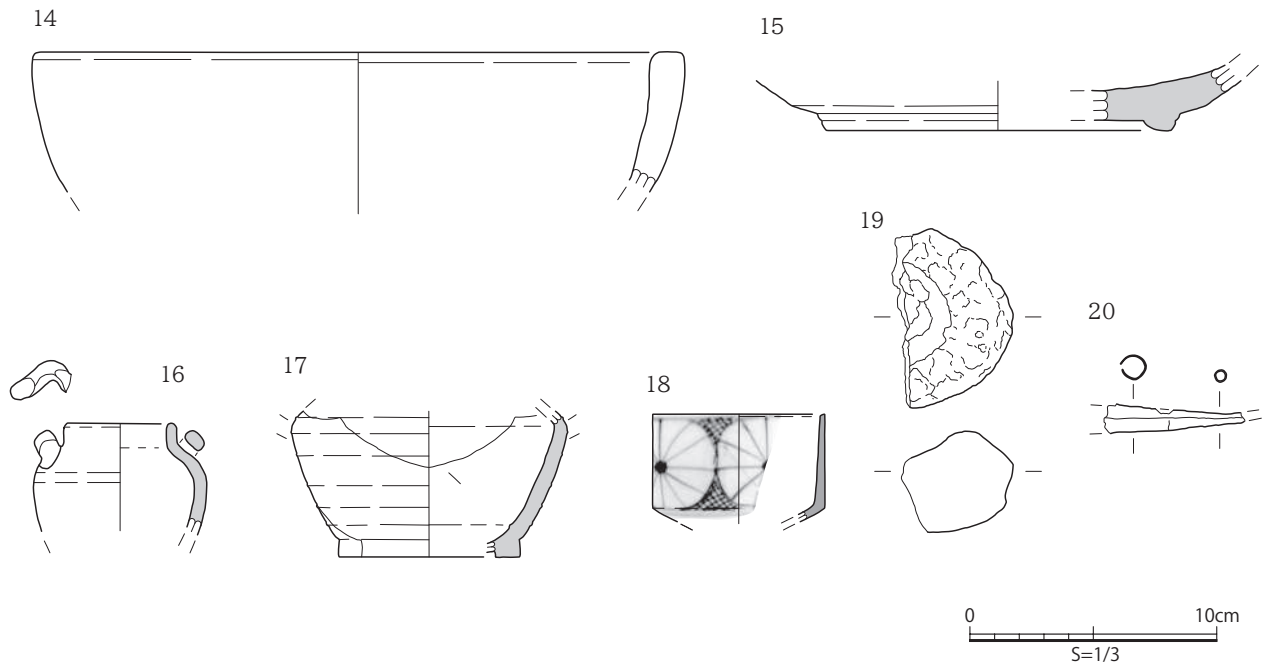


第10図 遺物垂直分布図

江戸1期



江戸2期



第11図 出土遺物実測図

第2表 出土遺物観察表

図版番号	層位	種類	器種	寸法 (cm) () は推定値		色調 内側/外側 (内外同色は1色記入)	成形	胎土	焼成	備考
				口径	器高					
1	東壁14層	土器	かわらけ	(10.8)	(2.9)	5YR5/3 にぶい赤褐 / 7.5YR7/1 明褐灰	ロクロナデ後内面横ナデ? 底部に回転糸切痕	密、金雲母	良好	内面一部に黒斑
2	東壁14層	土器	かわらけ	—	(1.1)	7.5YR6/3 にぶい褐	内面横ナデ	密、雲母、白色粒子、赤色粒子	良好	
3	3面目	土器	かわらけ	—	(2.2)	5YR5/6 明赤褐	内面横ナデ	密、金雲母	良好	
4	3面目	土器	かわらけ	—	(2.0)	5YR6/6 橙	内面外面横ナデ	密、金雲母、白色粒子	良好	
5	3面目	土器	かわらけ	—	(2.0)	5YR7/4 にぶい橙		密、金雲母	良好	
6	東壁14層	土器	かわらけ	—	(1.8)	5YR6/6 橙	内面外面横ナデ	密、白色粒子、赤色粒子	良好	
7	3面目	土器	焙烙鍋	(16.6)	(4.2)	7.5YR3/1 黒褐 / 5YR5/3 にぶい赤褐		密、金雲母、白色粒子	良好	
8	東壁14層	土器	内耳鍋	—	(3.2)	5YR4/3 にぶい赤褐 / 5YR2/1 黒褐		密、雲母、白色粒子、赤色粒子	良好	
9	3面目	磁器	猪口	—	(1.9)	7.5YR8/1 灰白		密	良好	
10	2~3面の中間層	陶器	碗か	(8.8)	(2.4)	5Y5/2 灰オリーブ		密	良好	
11	3面目	陶器	碗か	—	(2.0)	5YR7/2 灰白		密	良好	
12	東壁14層	陶器	皿か	(11.6)	(2.5)	7.5Y7/1 灰白		密	良好	
14	不明	土器	鍋	(26.4)	(5.7)	7.5YR6/6 橙 / 7.5YR6/4 にぶい橙		密、金雲母、白色粒子	良好	
15	2面目直上	陶器	鉢 / 甕か	—	(2.7)	2.5Y8/3 淡黄 / 10YR7/4 にぶい黄橙		密	良好	
16	1面目耕作土中	陶器	茶入れ	(4.6)	(4.5)	7.5YR6/4 にぶい橙 / 2.5YR5/3 黄褐		密	良好	
17	1面目耕作土中	陶器	茶入れ	—	(5.3)	10YR7/4 にぶい黄橙 / 5Y6/2 灰オリーブ		密	良好	
18	1面目耕作土中	磁器	半筒碗	(7.0)	(4.4)	7.5YR8/1 灰白		密	良好	

図版番号	層位	器種	寸法 (cm)		重量 (g)	石材	備考	
			最大長	最大幅				
19	1面目耕作土下層	凹石	(4.9)	(7.2)	(4.1)	118.0	安山岩	

図版番号	層位	器種	寸法 (cm)		備考
			最大長	最大幅	
13	3面目	不明	—	—	鉄製
20	2面目	キセル	長 / 5.8	直径 / 1.1	吸口、銅製

第4章 自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

はじめに

西下条五割遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法

試料は、第1面上層から出土した炭化材（試料 No.1:PLD-49812）、第2面耕作土中から出土した生材（試料 No.2:PLD-49813）、第3面耕作土中から出土した炭化材（試料 No.3:PLD-49814）、第3面下層から出土した炭化材（試料 No.4:PLD-49815）の、合計4点である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第3表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49812	位置：第1面上層 遺物No. C2 試料No. 1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49813	位置：第2面耕作土中 遺物No. C4 試料No. 2	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49814	位置：第3面耕作土中 遺物No. C10 試料No. 3	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-49815	位置：第3面下層 遺物No. C14 試料No. 4	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20、暦年較正結果が1950年以降にのびる

試料については Post-bomb atmospheric NH₂) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ¹⁴C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ¹⁴C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第 4 表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-49812 試料No. 1	-23.20 \pm 0.21	200 \pm 19	200 \pm 20	Post-bomb NH ₂ curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1661-1678 cal AD (19.18%) 1742-1751 cal AD (9.00%) 1764-1774 cal AD (10.29%) 1776-1788 cal AD (14.33%) 1792-1799 cal AD (8.19%) 1942-1944 cal AD (1.93%) 1944-1950 cal AD (5.34%)	Post-bomb NH ₂ curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1656-1684 cal AD (24.25%) 1733-1757 cal AD (15.19%) 1759-1803 cal AD (41.08%) 1928-1954 cal AD (14.92%)
PLD-49813 試料No. 2	-26.16 \pm 0.19	475 \pm 19	475 \pm 20	1427-1442 cal AD (68.27%)	1420-1451 cal AD (95.45%)
PLD-49814 試料No. 3	-24.26 \pm 0.20	144 \pm 19	145 \pm 20	Post-bomb NH ₂ curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1682-1696 cal AD (9.31%) 1724-1739 cal AD (9.16%) 1754-1762 cal AD (4.18%) 1800-1812 cal AD (7.40%) 1836-1879 cal AD (22.84%) 1914-1939 cal AD (14.99%) 1953-1954 cal AD (0.39%)	Post-bomb NH ₂ curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1671-1709 cal AD (15.00%) 1720-1768 cal AD (20.10%) 1771-1779 cal AD (1.86%) 1798-1818 cal AD (9.57%) 1832-1892 cal AD (27.69%) 1906-1948 cal AD (20.28%) 1951-1954 cal AD (0.96%)
PLD-49815 試料No. 4	-25.56 \pm 0.19	248 \pm 19	250 \pm 20	Post-bomb NH ₂ curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1643-1661 cal AD (57.56%) 1788-1793 cal AD (10.70%)	Post-bomb NH ₂ curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1531-1536 cal AD (1.11%) 1636-1668 cal AD (69.19%) 1781-1796 cal AD (20.37%) 1945-1946 cal AD (0.20%) 1948-1953 cal AD (4.59%)

考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2 σ 暦年代範囲（確率 95.45%）に着目して結果を整理する。

第 1 層上層から出土した炭化材（試料 No.1 : PLD-49812）は、1656-1684 cal AD (24.25%)、1733-1757 cal AD (15.19%)、1759-1803 cal AD (41.08%)、1928-1954 cal AD (14.92%) の暦年代範囲を示した。これは 17 世紀中頃～後半もしくは 18 世紀前半～19 世紀初頭、20 世紀前半～中頃で、江戸時代前期～後期および昭和時代に相当する。今回の測定結果は、推定時期の近世に対して整合的である。

第 2 面耕作土中から出土した生材（試料 No.2 : PLD-49813）は、1420-1451 cal AD (95.45%) の暦年代範囲を示した。これは 15 世紀前半～中頃で、室町時代に相当する。今回の測定結果は、推定時期である近世よりも 150～450 年ほど古い年代であった。

第 3 面耕作土中から出土した炭化材（試料 No.3 : PLD-49814）は、1671-1709 cal AD (15.00%)、1720-1768 cal AD (20.10%)、1771-1779 cal AD (1.86%)、1798-1818 cal AD (9.57%)、1832-1892 cal AD (27.69%)、1906-1948 cal AD (20.28%)、1951-1954 cal AD (0.96%) の暦年代範囲を示した。これは 17 世紀後半～20 世紀中頃で、江戸時代前期～昭和時代に相当する。今回の測定結果は、推定時期である中世よりも 70 年以上新しい年代であった。

第 3 面下層から出土した炭化材（試料 No.4 : PLD-49815）は、1531-1536 cal AD (1.11%)、1636-1668 cal AD (69.19%)、1781-1796 cal AD (20.37%)、1945-1946 cal AD (0.20%)、1948-1953 cal AD (4.59%) の暦年代範囲を示した。これは 16 世紀前半および 17 世紀前半～後半、18 世紀後半～末、20 世紀中頃で、室町時代～江戸時代中期および昭和時代に相当する。今回の測定結果は、推定時期である中世に対して整合的である。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。第 2 面耕作土中の試料 No.2 は、最終形

成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、木が伐採もしくは枯死した年代を示していると考えられる。その他の3試料は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、試料の木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

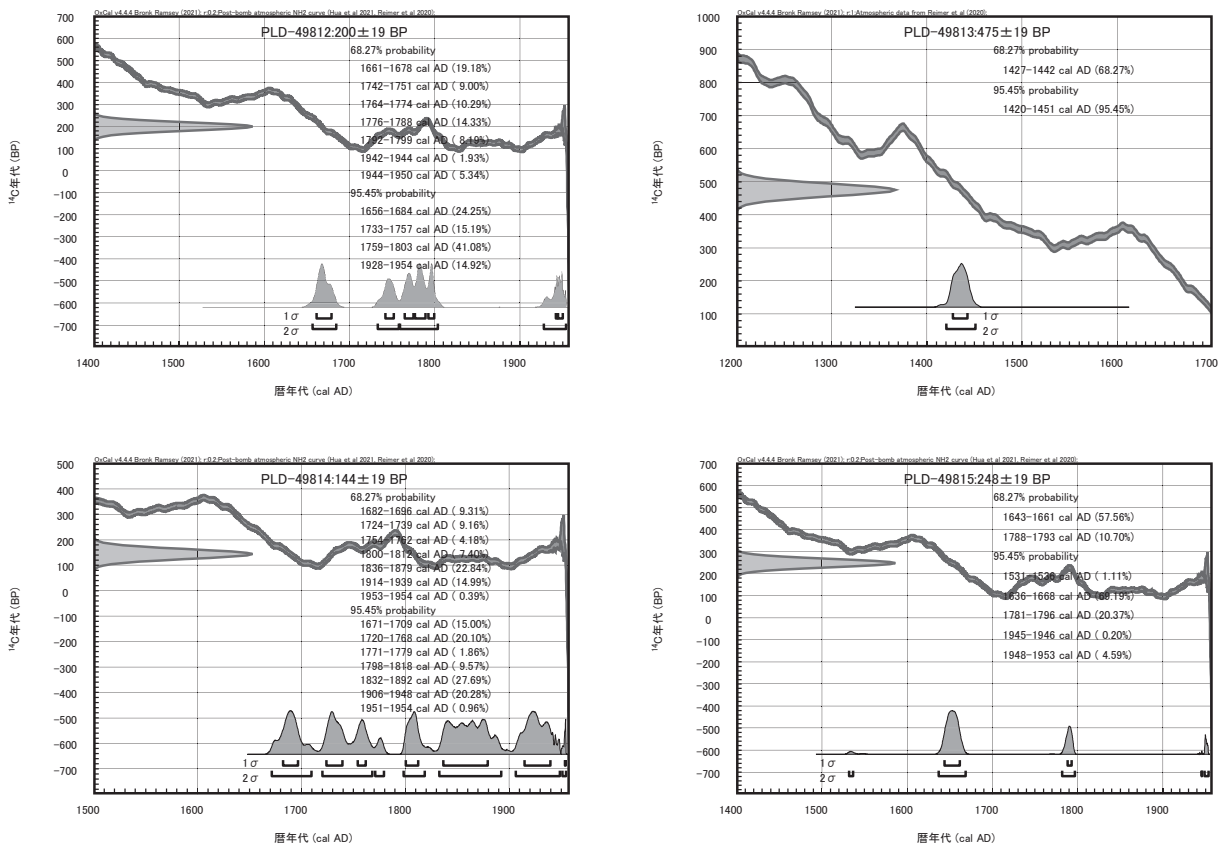
参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) , 337-360.

Hua, Q., Turnbull, J., Santos, G., Rakowski, A., Ancapichún, S., De Pol-Holz, Hammer, S., Lehman, S., Levin, I., Miller, J., Palmer, J., Turney, C. (2021) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2019. *Radiocarbon*, 64 (4) , 723-745. doi:10.1017/RDC.2021.95. <https://doi.org/10.1017/RDC.2021.95> (cited 23 November 2021)

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の ¹⁴C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . *Radiocarbon*, 62 (4) , 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



第 12 図 暦年較正年代グラフ

第5章 総括

西下条五割遺跡は笛吹川と荒川の合流点に近い氾濫原上に位置し、今回の調査では計3面、合計1,100㎡の発掘調査を実施した。遺跡からは、3面の遺構面全てにおいて近世とみられる水田跡が発見され、それに伴い畦畔、水口、足跡群が検出された。ここでは、調査で得られた成果について述べたい。

(1) 遺構

江戸1期では東西方向にやや斜交して走る畦畔一条を確認した。本遺構面を貫入する噴砂、及び地割れの状況から、江戸1期水田耕作途絶後、大規模な地震等の影響により遺跡周辺に液状化現象が発生したものと推察される。

江戸2期においては、江戸1期と位置の異なる南北方向に走る1条の畦畔を検出し、水田区画の変化が確認された。それぞれ畦畔1条のみの検出であったため、具体的な区画変化については不明であるものの、江戸1期耕作途絶後、再度水田としての利用が再開する段階で区画の変化が起こったものと推察される。また江戸2期水田面においては、水田東面が砂層によって削られている状況が確認され、洪水により水田が部分的に破壊されたのち、それを復旧する形で江戸3期の水田が造成されたものと推察される。

(2) 各水田の時期

西下条五割遺跡では、計3面から土器、陶磁器、石製品、金属製品が出土した。今回の調査で出土した遺物は破片資料が主であり、各水田面の年代の比定は困難である。また耕作を通じて攪拌の起こる水田跡という遺跡の特性、洪水に伴い遺物のながれ込みがある可能性を踏まえ、明確な時期の特定が困難であるといえる。

各遺構面の年代については、採取した炭化物の放射性炭素年代測定と合わせ、江戸1期は18世紀代、江戸2期は18～19世紀。また、江戸3期はさらに時期が下るものとみられる。なお18世紀に発生した大地震には元禄16年(1703)に発生した元禄地震、宝永4年(1707)に発生した宝永地震などが挙げられる。

これまで甲府盆地南部の埋蔵文化財調査事例は少なく、特に西下条町地域では本遺跡の発掘調査が初の本格的な調査事例となる。調査では、現地表下約3m(標高250.2m)より江戸時代の水田面が埋没しており、当該地域周辺の地下深くに埋蔵文化財が眠っていることを示唆している。なお、現在調査中の大津天神堂遺跡(本遺跡から西へ1.3km)では標高248.7mに15世紀の遺跡があり、甲府盆地内の微地形の変化を知る上で貴重な事例となった。

今回の調査成果から水田という生産域に伴う村落の存在などが示唆され、西下条町五割遺跡の存在は今後未発見の遺跡を補足する上で重要な役割を果たすものと考えられる。今後の発掘調査に伴う資料増加と合わせ、過去の土地利用の一端を示すものになると期待される。

写真図版



調査区遠景 北東から釜無川方面を望む

写真図版 2



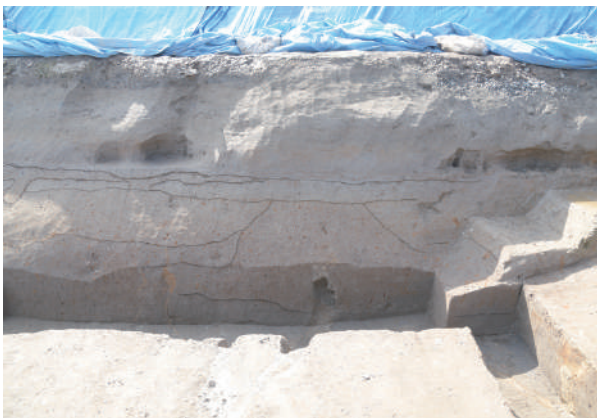
江戸1期 完掘状況



噴砂検出状況



北壁噴砂土層断面



1号畦畔検出状況（西壁）



1号畦畔検出状況（北壁）



江戸3期 完掘状況



2号・3号畦畔土層断面

写真図版 4



足跡群 完掘状況



2号・3号畦畔完掘状況



水口 検出状況



足跡 半裁



調査区東壁 下層土層



江戸1期 かわらけ出土状況



江戸1期 焙烙鍋出土状況



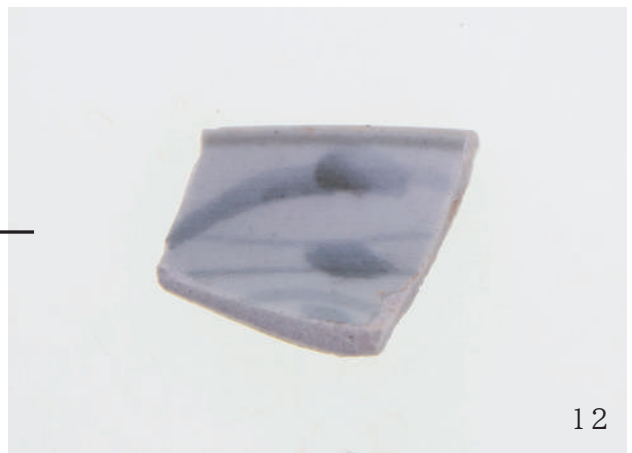
江戸1期 かわらけ出土状況



江戸2期 キセル出土状況

写真図版 6





写真図版 8



報告書抄録

ふりがな	にしもじょうごわりいせき							
書名	西下条五割遺跡							
副書名	中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第347集							
編著者名	鷹野あきこ・熊谷晋祐							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL:055-266-3016							
発行機関	山梨県観光文化・スポーツ部 東海旅客株式会社							
発行日	2024年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
にしもじょうごわりいせき 西下条五割遺跡	甲府市 西下条町 地内	192015		35° 36′ 18″	138° 34′ 38″	2023.02.06 ～ 2023.04.21	1,110㎡	中央新幹線 （品川・名古屋 間）建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	水田跡	近世	畦畔、水口、足跡 群		土師質土器、陶磁器、 石製品、金属製品			
要約	地表下約3m地点において、計3面の近世の水田跡が発見され、それに伴い畦畔や水口、足跡群が検出された。長期間にわたる水田利用が明らかとなり、水田区画の変化、洪水や地震の痕跡が見られた。							

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第347集

西下条五割遺跡

中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴う発掘調査報告書

2024年3月6日 印刷

2024年3月15日 発行

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3016
maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

発行 山梨県観光文化・スポーツ部 東海旅客鉄道株式会社
印刷 株式会社 峽南堂印刷所

